
昼下がりの悪夢

ジャコビ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

昼下がりの悪夢

【Nコード】

N3603B

【作者名】

ジャコビ

【あらすじ】

とある昼下がり。男を襲った悪夢とは――

昼食を終えてしばらく経った時、激しい腹痛が断続的に襲ってきた。ことは一刻を争う。この猛烈な生理的欲求は、容赦なく俺の下腹部を刺激する。ああ、脂汗まで流れてきた。一刻も早く「あれ」を探さなければ、とんでもない事態になってしまう。

どこならある？ コンビニか、スーパーだ。だが、あいにく視認できる範囲には見つからない。見えるのは、真新しく立派な家が立ち並ぶ住宅街だけだ。

こうなったら、背に腹は変えられない。恥をしのんで、頼むしかない。

トイレ貸してください、と――

俺は、一番手近なところにある家に入った。

呼び鈴を押そうとしたのだが、その手間は省けた。ドアが開け放たれていて、玄関に人がいる。俺はきりきりと痛む腹を押さえるため、前かがみ気味の姿勢をキープしなければいけない。体を起こして呼び鈴を押すのは至難の技だと思っていたので、思わぬ幸運に感謝した。

出かけるところだったのだろうか。きちんとスーツを着込んだ若い女性だった。彼女は俺を見ると、まぶしいほどの笑顔で迎えてくれた。

地獄に仏とはこのことか、と思う間もなく、脳髓に衝撃が走った。目の前にいるのは、仏様ではなく、女神だったのだ。

ゆるやかなウェーブの長い髪にふちどられた、小さな顔。その顔にはアンバランスなほどの、大きな瞳が輝いている。珊瑚のようなピンク色に塗られたぽってりとした唇は、つやつやと光って、俺を桃源郷へといざなう。

あるうことか、俺は目の前の女性に、一目で恋してしまった。そ

んな場合ではないのに。

これは予想外の難関だ。相手が中年の主婦なら、こんな問題は起きなかったはずだ。

今は羞恥心など捨て去るべきだ。俺は意を決して言おうとした。が、言えなかった。

もし、これをきっかけにして、目の前の彼女と付き合えたとする。こんな恋の始まり方は絶対に嫌だ。結婚披露宴で、二人の馴れ初めは、雅彦君の下痢のせいですなんて言われた日には、一生太陽の下を歩けない。

考えただけで身震いがする。俺はそんなお笑いキャラじゃない。

俺は、なんでもありません、とあいまいに言葉を濁した。俺のビーンナス、後でまた会おう。意思の力で腹痛を押さえ込み、背筋をピンと伸ばしてできる限りクールにその家から立ち去った。

今の家は、この窮地を脱してからもう一度訪ねてみることにして、俺は、すぐ隣の家に行くことにした。

思えば、昔から胃腸の弱い子供だった。特に理由もないのに、腹が痛くなる。今朝食べたものの中に、犯人らしきものは見つからない。食あたりでないとすれば、過敏性大腸症候群というやつだろう。俺は、手の甲の中心部から少し薬指寄りのところにあるツボを、親指でゴリゴリ強めに押しもみした。少し楽になったようだ。こういうときに便利なツボだが、「下痢点」という、見もふたもない名前がついているのが玉にキズだ。

ここはいわゆる、高級住宅街なのだろう。一軒一軒の敷地がやたらと広い。歩道の脇には、のぼりが立っている。どこか近くのスーパーで特売でもしているのだろうか。

隣の家も、玄関の扉が開いていた。今度は、玄関にいたのは中年の男だ。助かった！

「すみません、トイレを貸していただきたいのですが」

極力丁寧に言ったつもりだった。脂汗を流し、下腹部を抱えてい

る様子から、どう見ても目的はひとつだと分かりそうなものだが、万が一強盗に間違えられても困る。懸命に、怪しい者ではないというオーラを出した。本当はそれどころではなく、すぐさまトイレに駆け込みたかったが、俺にもまだ、社会人としての良識が残っていた。

だが、無情にも彼は、笑顔の下に拒絶の色をにじませている。

「申し訳ありません。それはちょっと承知しかねます」

なんとなく、予想はしていた。

「そこを何とか。お願いします！」

俺は再度懇願した。が、彼は困惑しきった表情で、欧米人のように肩をすくめる。彼の服装を見て、俺はふと、気がついた。端正にビジネススーツを着こなしている。彼はこれから仕事へ行くのだろう。出勤直前に、トイレを貸してほしいという人が来て、トイレを貸していたら、電車に乗り遅れて遅刻しました、なんていいわけをしようものなら、もっとマシな作り話をしろ！ と上司に一喝されそうだった。この歳になって、いや、いくつであっても遅刻で上司に怒られるのは、かなり情けない。俺の括約筋も限界が近いが、これ以上彼を煩わせるのも気の毒だ。あきらめて、他をあたることにしよう。

それにしても、容赦なく襲ってくる下腹部の蠕動運動ぜんどう。それは、もう蠕動などという生易しい表現では言い表せない。下腹部に巨大な竜が入り込んで、怒りの趣くままに暴れ狂っているようだ。

ぎゅるる、ぎゅるると、不気味な音がする。俺は半泣きになった。ああ、神様。悪夢なら早く目を覚まさせてください。

手の甲のツボを押しながら、さらに隣の家に行く。三度目の正直を期待して。

ここも玄関のドアを開け放している。いったいこの住宅街はなんなんだ。小奇麗で治安はよさそうだが、無用心にもほどがある。

今度の家は、若い女性がいた。が、一軒目の彼女のような、俺の

タイプに直球ど真ん中ストレートというには遠く及ばない。ハムスターとかの小動物みたいな、気弱そうな女だ。しかも、廊下のモップがけをしている。しめた！ 今度こそ、地獄に仏だ。若い女だから、多少の羞恥心を感じるが、この際ぜいたくは言っていられない。俺は、できるだけ低姿勢に、ハムスターをおびえさせないように配慮して言った。

「すみませんが、トイレを貸して下さい」

ハムスター女は、顔を曇らせた。この街の住人は、ことごとく他人にトイレを貸すのが嫌らしい。

「お願いします。トイレ、貸して下さい」

俺は、再度頼んだ。ここで断られたら、本当にやばい。もうツボも押しすぎて、効果が得られなくなっている。

ハムスター女は、おどおどと視線を泳がせて、外を指差した。

「あ、あの、ここを出て左に五百メートルほど行っただころに事務所があります。そのトイレなら……」

何だと。ここから五百メートルも歩けと言うのか。その間に、もしもれたら誰が責任とってくれるんだ。このトイレを使わせてくれれば、それで済む話だ。

俺の頭の中で、ぷちん、と何かがはじけた気がした。

「ふざけるな！」

俺の怒声に、ハムスター女が怯える。ますますハムスターそっくりだ。

「こんなでかい家に、トイレがないわけがないだろう！ それとも何か？ 私はうんこなんてしませんとも言ったのか！ どけ！」

俺は、玄関を上がりこんで、ハムスター女が必死で制止するのを振り払い、ずかずかと廊下を進んだ。程なくして目的のドアを見つけた。

ドアを開けると、まっ白に輝く陶器が、目にまぶしい。あんなにも渴望したものが、そこにある。広大な砂漠を延々と歩き続け、よ

うやくオアシスを見つけたのだ。すばやく中に入り、鍵をかけた。ドアをどんと叩く音と、ハムスター女が「やめて」と叫ぶ声が聞こえてきた。ここまできたんだ、誰にも邪魔されてたまるか。俺は、一年に一度しか織姫に会えない、彦星のような心境だった。しかも、これまで二年連続雨天の七夕だったのだ。こんなにも感動するものなのか。おもむろにズボンを下ろして、便座に座った。

その瞬間、途方もない快楽を得た。普段はなんとも思わない、単なる生理的欲求の解消。それだけのことが、こんなに崇高な行為になるとは。俺は、忘我の境地に達した。今、俺の頭上には天使が舞い降りているに違いない。

ようやく人心地がついた。改めてハムスター女への憎悪が湧き上がってきた。危うくもらすところだったんだぞ。幼稚園児じやあるまいし、社会人になったこの俺が、おもらしましたーなんて誰かに知られたら致命的だ。

先ほどまでは死ぬか生きるかの瀬戸際だったが、室内を見回す余裕が出てきた。よく見ると、無駄に広いトイレだ。手を洗う場所がトイレタンクの上、等というけちくさいところではなく、洗面所ともいうべき大きさで便器横の壁面に設置されている。大きな鏡に俺の顔が映っていた。おそらく、先ほどまでは土気色をしていたであろう頬は、今はバラ色に輝いている。乱れてしまった髪を整え、女神の元へ向かう自分を夢想する。

そして、水を流そうとレバーをひねる。

「？」

何度もひねる、逆方向にもひねってみる。が、一向に水が流れない。壊れているのか？ よく見ると、俺がよく知っているトイレとは、何かが違う。

最新式のウォシュレットだからというわけではない。水がないのだ。慌てて、洗面所のような手洗い場の蛇口をひねるが、ここも、一滴たりとも水が出ない。

相変わらず、ドアを叩いている音がする。いったいどういうことが聞かねばならないだろう。俺は、ロックを解除し、ドアを開けた。ハムスター女は、ドアの内側から漂ってくる臭気で、俺がしたことを察したようだ。絶望的な表情を見せ、今にも泣き出しそうになっている。

「……ここは住宅展示場ですから、トイレは使えないんです……」
俺は、まだ悪夢を見ているのか……？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3603b/>

昼下がりの悪夢

2010年10月8日15時08分発行